

---

# 大魔王が与えたもの

流離のアルケミスト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大魔王が与えたもの

### 【Nコード】

N4984G

### 【作者名】

流離のアルケミスト

### 【あらすじ】

14歳という蒼き時代は、少年少女にとって沢山の経験をし、多くを吸収する年齢。そこでの経験や感じ取った出来事は時にその人の人生に大きく影響を与えることもある。平凡な日常から一転、築き上げてきたものすべてを失った少年は出会う。大魔王に。そして…知る。

少年は知る。

その少年はごくごく普通の生活を送っていた。父親は公務員、母親は専業主婦の傍らパートで生活費を稼ぐ。それと十歳の妹が一人とペットの犬が一匹。一戸建て庭付きの家。そこには平穏があった。

少年は中学の野球部でレギュラーとして活躍していた。全てが上手くいっていた。しかし、それはやってきた。少年の元に舞い降りた。

中学二年生、秋。

・・・夏の思い出僅かに、少年は病院の真新しい白いベッドの上から青く、蒼く澄んだ外の世界を見上げていた・・・

病名は「骨肉腫」だった。いわゆる癌だ。

平穏は消え去った。闇の大魔王が舞い降りた。

そこからは日々が苦痛となった。

抗癌剤による治療、副作用によるひどい悪心・嘔吐。

手術によって左大腿骨上部から膝下までを切断し、人工関節の置換を行う。

激痛。痛み止めとは名ばかりだ。痛み止めなんて超越する痛みがそのとき確かに存在した。

苦しいリハビリ。部活で走り回ったその足は、今、歩くことさえできない。

曲がらない。動かない。重い・・・。

大魔王は少年にどれだけの苦しみを与えるのだろうか。どれだけ、それは続くのだろうか。

少年は見た。大魔王が微笑むのを。

少年は知った。彼がいつも側にいることを。

少年の世界には彼と、そして大魔王の二人だけが住んでいた。

ある時、少年の世界に新たな住人がやってきた。

望月さん。少年を担当していた看護師だ。

彼女は少年と話をした。来る日も来る日も話した。

病気のこと、治療のこと、手術のこと、学校のこと、勉強のこと、部活のこと、テレビのこと、食事のこと。何でも話した。

少年は彼女を信頼した。彼女の笑顔で少年は安心できた。

彼女が住みついてから、少年はあることに気づき始める。

彼女だけじゃない、たくさんの人が少年の世界を目指していることを。

手術がおわり、しばらくして学校から少年の元へ”鶴”が届く。

十二色にグラデーションされたその千羽の鶴は少年の世界を美しく羽ばたき、明るく照らした。

その羽にはクラスの友達一人一人からメッセージが書かれていた。

「さつさと帰ってきやがれ。」

少年の世界に新たな35名の住人が登録された。

治療は終了した。癌はキレイになくなった。転移がなかったのは奇跡だった。

歩けるようにもなった。人工関節なんてクソくらえ！お前はすでに俺の脚さ！

この頃には少年の世界はたくさん「人」であふれていた。

家族、看護師さん、お医者さん、学校のみんな、病院で出会った戦友たち。

《ありがとう》

少年の素直な気持ちだった。

退院の前夜、消灯して暗い少年の部屋に看護師の西垣さんがやってきた。

暗い中に彼の笑顔がぼんやりと浮かんでいた。

「当直で、明日の朝オレは居ないから。長い付き合いだったな。じやあ、元気で。」

もう、ここには帰ってくんなよ。」

少年と西垣さんは握手した。

彼の手は大きく、温かかった。これが少年を支えた手。彼の笑顔が涙でかすんで見えない事に少年は気づいていた。

少年は少しだけ寂しさを感じていた。

一年間、少年は白く覆われた壁の中で過ごした。

蒼く輝く外の世界を夢見てきた。

夏の日差しが肌をつく。

空が高く、広く感じた。

《ありがとうございました》

少年の素直な気持ちだった。

それからもとの学校に通い、受験勉強に終われる日々。

ある日、階段につまづき足をひねる。

急遽、病院に搬送。

悪夢が再び少年の頭をよぎる。

青ざめた少年を出迎えたのは、入院中少年の担当だった、研修医の

小林先生。

骨にも人工関節にも異常がないことを伝えた。

彼は少年から見ても頼りない学生上がりたての医者だった。

けれどこの時は、彼の笑顔に、対応に、「良かったね」の一言に、  
どれだけ励まされたことだろう。

こんなに頼りになる人はいないと少年は思った。

そして、「人間」としてこんな人になりたいと少年は強く思ったの  
だった。

救急で運ばれてきた少年の元へ一番に駆けつけてくれた。退院して、  
ずいぶん経った今でもずっと気にかけてくれていた。

あなたのような「人」になる。

もっともっと成長して。

少年は決意する。そして感謝する。

《ありがとう》

少年は壁を壊す。

新たなる道をゆく。新たなる世界に向かって歩き始める。

蒼き過去はかすんでいく。白き部屋に別れを告げる。

少年の世界もその住人も、大魔王さえも薄れていく。

そこに寂しさを感じていた。変化を拒絶していた。

しかし、それは心の中にしっかりと刻めばいい。

全てをしつかりと抱えて歩いていけばいい。

大魔王は少年に与えた。

「人」を。

「希望」を。

「未来」を。

そして、「幸せ」を。

物事には必ず意味があるのではないか。

それは大魔王が提示する課題なんだ。

十四歳の秋、少年にとって必要なものを大魔王は与えた。

その真の意味を知るのは少年ただ一人なのかもしれない。

・・・少年は知る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4984g/>

---

大魔王が与えたもの

2010年10月21日22時47分発行